

実践研究者としての現職教師を育成する 夜間・遠隔大学院のカリキュラム

加藤直樹*1, 益子典文*2, 村瀬康一郎*3

【概要】「実践研究者としての教師(Teacher as Researcher)」の概念を用いて、現職教師の専門性を向上させるための「働きながら学ぶ現職教師のための遠隔大学院」の在り方を再検討した。学校での実践を継続しつつ研究するためには、遠隔教育が適切な教育研究環境となり得ることを示し、これを具現化するための夜間・遠隔大学院における実践研究者としての教師を育成するカリキュラムについて検討した。

【キーワード】遠隔教育, 実践研究者としての教師, 大学院教育, 教師教育, カリキュラム

1. はじめに

教員養成系大学院を主として2008年4月より教職大学院が、スクールリーダ及び新しい学校づくりの有力な一員となる新任教員の養成を目的として学生の受け入れを開始した。一方、教職大学院を設置するほとんどの大学では、教育学研究科に既存の修士課程が設置されており、両者の教育研究目的の特色を明確にする必要がある。岐阜大学大学院教育学研究科においても、教職大学院として教職実践開発専攻が設置され、筆者らが所属する既存の修士課程であるカリキュラム開発専攻(以下、本専攻という)についても教育研究目的の特色の明確化が求められことは言うまでもない。とくに、大学院修士課程における現職教師に対する教育研究目的の再構築が喫緊の課題となる。

本研究科では、1999年から現職教師を主な対象とした夜間・遠隔大学院による学修機会の充実を図ってきた。2004年から2007年にかけて本専攻では「働きながら学ぶ現職教師のための遠隔大学院」としての教育方法の開発を主要課題としてきたが、その過程で教育実践を日常的に持続可能としていることに、その特色を

見出そうとしてきた。

すなわち、大学の研究者と現職教師の実践者が常に教育実践を基盤として協働した研究の関係を具現化するものとなり、理論と実践、研究者と実践者の関係性に対する課題に対して、ひとつの教育研究モデルとなると考えてきた。教職大学院の設置を契機として、本専攻の教育研究目的を再検討するにあたり、ステンハウスの「実践研究者としての教師(Teacher as Researcher)」の概念を用いることで、特色を明確化し、カリキュラムの理念の明確化とその改善を図ることが可能と考えた。

2. 実践研究者としての教師

今津(1996)によれば、「実践研究者としての教師」は、大学院で理論を学び学校で利用する、研究者に従属する存在としての「理論受容者としての教師」を否定し、教師が主体となって授業過程で何が起きているかを実践しながら観察・研究し、自分の実践記録について、医者がケース研究を積み重ねるように互いに検討すれば、共通する概念や理論戦略が得られ、そうした協働の実践研究作業を進めるなかで、教

*1 KATO, Naoki : 岐阜大学 e-mail= nkato@gifu-u.ac.jp

*2 MASHIKO, Norifumi : 岐阜大学 e-mail= mashiko@gifu-u.ac.jp

*3 MURASE, Koichiro : 岐阜大学 e-mail= murase@gifu-u.ac.jp

師の専門性も向上していく、という自律的な見方に立つものである。本専攻におけるこれまでの取組は、まさにこのような人材の育成をねらいとするものであり、「実践研究者としての教師」の活動を、ドキュメント化および報告の場も含めて修了生に提供するものである。

さらに今津は、アクションリサーチにおける研究者と教師の関係の検討にまで踏み込み、理論ないし研究と実践を相互に重ね合わせることによって、研究者と教師の双方にそれぞれ自己省察がもたらされ、予期しない調査研究成果が生み出されるような関係のあり方として「自省創発的協働関係」の方法原理を提案し、校内研修をフィールドとして検討している。この原理を本専攻の実践研究の実際に照らして一部を修正すると、以下のように検討できる。

①学校教師が抱える実際的な問題と、研究者が提起する一般的なテーマとを照らし合わせながら、教師たちは実践的な研究計画を練り上げる。②研究者はその作業に参画しながら研究の設計や実施方法などについて助言を行う。③そして、教師と調査結果の解釈や諸成果を説明する概念などについて議論を重ねる。④このとき研究者は、教師の研究活動を援助する役割を果たしつつ、教育実践の過程を綿密に把握する。

学校での教育実践を大学院在学中も継続可能とする「働きながら学ぶ現職教師のための遠隔大学院」の教育理念は、「実践研究者としての教師」を「自省創発的協働関係」の方法原理に基づいて育成するということになる。

3. 夜間・遠隔大学院

本学における高機能テレビ会議システムを活用した遠隔教育の取組は、1997年に開始した免許法認定公開講座から11年目を迎えている。この期間の取組を概観すると以下ようになる。

(1) 第一期：遠隔教育手法の検証

「学修機会の拡大」を課題としてテレビ会議システムを利用した遠隔教育手法を免許法認定公開講座や大学院科目等履修により検証した。1997年～1998年

(2) 第二期：遠隔大学院の教育体制構築

教育学研究科において夜間・遠隔教育により職場等に近いサテライト教室で学び、入学から修了までの学修を支援する教育体制を学校教育専攻、後にカリキュラム開発専攻において構築した。1999年～2003年

(3) 第三期：遠隔大学院の教育方法開発

「働きながら学ぶ現職教師のための遠隔大学院」として学校における教育実践を継続しつつ大学院で学ぶための教育方法の開発を進めた。2003年～2007年

これらの取組から、「働きながら学ぶ」ことの意義を再検討し、これまでの「学修機会の拡大」に基づく展開から、「実践研究者としての教師」を育成するための効果的な教育方法として遠隔教育を見直すこととなる。

遠隔教育に対する主な議論は、学修機会の拡大というパラダイムで行われることが多く、新しい技術を活用して対面授業を拡張するものにとらえるため教育効果が疑問視され、対面授業と遠隔授業の教育効果が比較検討される。しかし、この視点からは遠隔授業による教育効果が劣らないことを示すものの、その優位性を説明することは必ずしも期待されない。遠隔教育の優位性は、人材育成目的の達成というパラダイムで検討されなければならない。

本専攻に関わる遠隔教育の取組は、学修機会の拡大というパラダイムで開始され、第三期から人材育成目的の達成というパラダイムに転換しはじめ、「実践研究者としての教師」という育成目的を明確にすることで、遠隔教育の優位性を説明できるものとなる。

すなわち、「実践研究者としての教師」は、学校での日々の教育実践の場において育成さ

れるものであり、実践研究フィールドから離れて育成されることは想定されない。このため、働きながら学べる学修環境が必須となり遠隔教育の優位性を認めることができる。とくに、修士論文における指導は研究者との協働関係により進める必要があり、遠隔による継続的な研究指導を実現することが重要となる。

かくして、夜間・遠隔大学院は、「実践研究者としての教師」を育成するための効果的な教育モデルとなり得るのである。

4. カリキュラムの検討

本専攻の開講科目を表1に示す。実践研究を推進する能力を身につける中心となるのは、(c)【カリキュラム総合開発実践研究】および(d)【課題研究】の科目群である。(c)の科目は(a)の基礎的素養および(b)の中核的知識・技能の科目群で身につけた知識・技能を用いて、働きながら自らの実践の改善に取り組み、遠隔地の大学院生が直接対面し集団で実践研究の検討を行う科目である。(a)の科目群は研究科としての共通及び自由選択科目であり、非同期によって自己ペースでの学習を可能としている。(b)(d)の科目群は、高機能テレビ会議システムを用いた学習を基本としている。

本専攻の履修の概要を図1に示す。「実践研究者としての教師」の育成をねらいとしてカリキュラムの改善を図り、修了後も持続的な研究を支援するために実践研究目的化プログラムを取り入れることを予定している。

教育実践フィールドを大学院在学中も継続的に維持する夜間・遠隔大学院の教育モデルは、

表1 カリキュラム開発専攻の科目区分ならびに開講科目

知識・技能	科目区分	科目数
(a) 関連分野の基礎的素養	研究科共通科目	3科目
	研究科自由選択科目	17科目
(b) 中核的知識・技能	カリキュラム開発分野	9科目
	教育システム開発分野	7科目
	学習情報開発分野	8科目
(c) 協働的問題解決能力	カリキュラム総合開発実践研究	2科目
(d) 実践研究推進能力	課題研究	3科目

教師教育研究における理論と実践、研究者と学校教師の関係のあり方を具体化する取組でもある。

【参考文献】

- 1) 今津孝次郎(1996), 変動社会の教師教育, 名古屋大学出版会
- 2) 村瀬康一郎, 加藤直樹, 古田善伯, 益子典文ほか(2004), 働きながら学ぶ現職教師のための遠隔大学院の展開 (1) - 岐阜大学大学院教育学研究科「カリキュラム開発専攻」の教育課程 - . 日本教育工学会第20回全国大会講演論文集, Vol.20, pp.469-470
- 3) 加藤直樹, 村瀬康一郎, 益子典文, 松原正也 (2004), 働きながら学ぶ現職教師のための遠隔大学院の展開 (2) - 遠隔学習を実現するメディア統合型 e-Learning システム AIMS-Gifu - . 日本教育工学会第20回全国大会講演論文集, Vol.20, pp.471-472
- 4) 益子典文, 松川禮子, 加藤直樹, 村瀬康一郎 (2004) 働きながら学ぶ現職教師のための遠隔大学院の展開 (3) - AIMS-Gifu による大学院遠隔講義における学習のマネージメント - . 日本教育工学会第20回全国大会講演論文集, Vol.20, pp.473-474
- 5) 加藤直樹, 興戸律子 (2005), 教師教育における遠隔教育の経緯と現状 - 岐阜大学教育学研究科の取組み - . 岐阜大学カリキュラム開発研究, Vol.23, No.1, pp.9-16
- 6) 益子典文, 松川禮子, 加藤直樹, 村瀬康一郎 (2005) 働きながら学ぶ現職教師のための遠隔講義における学習のマネージメント - 夜間遠隔大学院におけるブレンディド学習のマネージメント方略 - . 日本科学教育学会研究会研究報告, Vol.19, No.5, pp.41-46
- 7) 益子典文, 加藤直樹, 村瀬康一郎 (2005), 働きながら学ぶ現職教師のための遠隔学習コースの開発と試行 - 「働く場」の特質を考慮したインタラクティブ設計 - . 日本教育工学会研究報告集, JSET05-5, pp.33-40
- 8) 加藤直樹, 村瀬康一郎, 益子典文 (2005), 働きながら学ぶ現職教師のための遠隔大学院の展開 (4) - 遠隔教育のカリキュラム運用 - . 日本教育工学会第21回全国大会講演論文集, pp.813-814
- 9) 益子典文, 加藤直樹, 村瀬康一郎 (2005), 働きながら学ぶ教師のための遠隔大学院の展開 (5) - 働きながら学ぶ教師のための遠隔講義設計の枠組み - . 日本教育工学会第21回全国大会講演論文集, pp.219-220
- 10) 加藤直樹, 村瀬康一郎, 益子典文(2006), 働きながら学ぶ現職教師のための遠隔大学院の展開 (6) - サテライト型からインターネット型への拡張 - . 日本教育工学会第22回全国大会講演論文集, pp.1067-1068
- 11) 益子典文, 加藤直樹, 村瀬康一郎(2007), 働きながら学ぶ現職教師のための遠隔大学院の展開 (7) - 学習における「仲間意識」の変化と講義方法との関係に関する一考察 - . 日本教育工学会第23回全国大会講演論文集, pp.219-220

